

浄土

五月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別扱承路雜誌第三五二号)
昭和四十四年四月二十五日印刷 昭和四十四年五月一日発行

第三十五卷

第五号



目 次

表紙「高原」松濤達文画

生死と時と念仏……………大久保 文 雄 (2)

〈特集〉子供と家庭と信仰

掛け橋は家庭で……………内 山 憲 尚 (4)

親 心……………釣 木 靈 海 (7)

二十二年目の五月人形……………黒 田 昌 史 (10)

十二因縁⑤ 後生の恐れ (六入) ……………渋谷 賢 応 (14)

仏教と経済……………浦 上 明 久 (17)

発 願……………杉 本 修 (20)

ハガキでひとこと⑤ 子供の日に因んで…………… (22)

聖典童話 闘諍を止めよ③……………つるたたんせん (24)

読者の声 現代に生きる阿弥陀さま…………… (28)

ひとくち伝記⑤ 手術台の十念……………高 橋 良 和 (30)

5月

今月のことば

若葉のかおる季節です。最近の都会の生活では、なかなか青葉若葉の美しさや、かおりを味うことはできにくくなってしまいました。そのため自然のなかに生かされている、という実感も次第にうすれてまいります。

生かされている、という実感は、どういう関係から味わわれるものなのでしょうか。

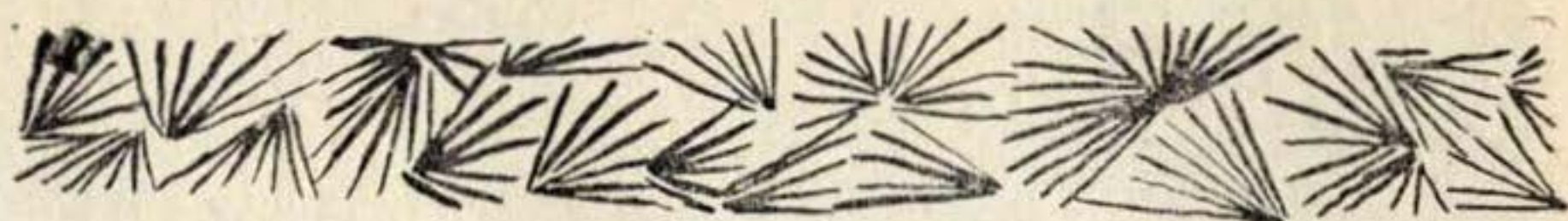
人間というものは、本来が「人と人との間柄」的存在であって、ロビンソン・クルーソーのように何ものとも関係なく、離れ小島に一人では生きていけるようなものではないでしょう。いなロビンソン・クルーソーは、自分をとりまく自然や鳥や獣を友として、それらと語り合い、それらのいのちを共にして生きていたとおもわれます。

ところが、「われ考えるゆえにわれ在り」から出発した近代的人間は、相手を必要とせず、独りで「考える人間」つまり、何ものともかかわり合いのない純粹に単独な、個人としての人間です。

それは個人としての人間の自覚をさせることができましたが、その行きすぎの弊害も、また多いようにおもわれます。

仏教に「他己」という言葉があります。自分自身、即ち自己は判るかもしれませんが、他己については、ちょっと判りにくいようです。しかし、それは「他としての己れ」つまり他という形にあらわれている自己、というべきもので、そこでは、自己の一切の他のものとの間柄が、グーバーの「我と汝」どころか、もっと親しい「我と我」の関係になってくるのです。

これは、端的に言えば、世界は一つのものという観方であり、宇宙的な大自然の生命共同体の自覚ということもできましよう。そこにこそ「生かされている」という実感が味わわれるのです。



—東京銀座・オキナ代表取締役—

大 久 保 文 雄

とかく、私どもの日常は、何かに捕われがちであります。そうして、その捕われの心からすべての生活がよどみがちになります。

おのれの一生のうちに再び戻ってくる事のない今日を、無意義に過してしまいます。

今日を真に生き、只今を本当に生き、身も心も一事にうちこむことこそ、真に生きる所以でありましょう。ところが今日も亦、明日明後日があるだろうと、おのが心の中に、その事をふまえて、或いは最後となるかも知れぬ今日を空費し勝ちなのが、私どもの日常の姿であるようです。

それは私どもが、今日只今の尊さを、すこしもわきまえぬところからくる妄想又は迷信が為す業と思います。

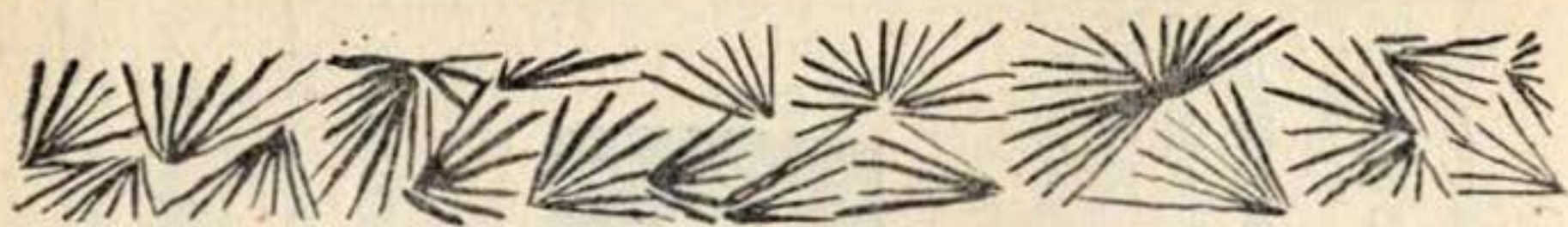
私どもの全生涯にただ一度しかない今日、過去・現在・未来の三世をふくむ只今の今日、只今をおいて、いつの日いつの時に完全にものにし（現成し）得られましょう。

今を活かす生活、現実の今日を真実に生きる事が永遠の生命を今日生きることになるのではないでしようか。

かの道元禪師は、殊にその日常生活の行持の綿密を重んぜられ『正法眼蔵』有時の巻に「有時はみな時なり、丈六金身これ時なり、今の十二時に習学すべし」と又、生死の巻に、「この生死は仏の御いのちなり」とも言われています。私どもの時間は、即ち仏のいのちの如く尊くもあり、まさに阿弥陀仏であります。それを忘れて、今日も徒らに空費空過したなら、その悔いこそ永遠に残るでありましょう。

私は毎朝、家の御仏前で念仏を唱えさせて頂いて居りますが、そのお念仏の一時でさえも、常に妄念に襲われて真に南無阿弥陀仏と一枚になり得ぬなやみをつづけて居ります。

今日こそ自分に残された最後の一日と思えば、おのずから生きる自覚と喜びを感謝せざ



生 死 と 時 と 念 仏

るを得ぬ筈であります。

自覚と感謝の念の起るところ、常に真剣ならざるを得ないでしょう。金銭や物質の無駄遣いは月末の家計に響くために何人といえども、自らブレーキもかけられましょうが、今日という時間の無駄遣いは忘れ勝ちとなりましょう。

さて然らば如何に今日を生くべきかとの課題になりますが、これを思う時にいつも思ひ出さるるのは道元禅師の御言葉に「それ修証はひとつにあらずとおもへる。すなはち外道の見なり。仏法には修証これ一等なり。いまま証上の修なるゆえに。初心の弁道。すなはち本証の全体なり」(弁道話)

私はこれを念仏になおしてもその通りで、念仏は本来修証一等と考えねばならぬと思います。即ち念仏こそ生死であり、煩惱であり、菩提であると思います。

ここに至り、私ども如何に生くべきかの課題は、念仏することそのものにあることと、つくづく思われます。

今日は今日として絶対であるが如く、念仏は念仏として絶対であり、只管本坐即ち只管念仏に通ずるのではないでしょう。

「刹那も時なり。久遠も時なり。時已に無時即ち常住なり」

とは、とって以て刹那も念仏なり、久遠も念仏なり、念仏こそ常住なりと考うべきであります。即ち生に当面しては生に純一にして念仏に生き、死に際しては死に無雜にして念仏に進すべきです。

念仏共生の師表椎尾弁匡上人の、

「時は今、ところあしもと、その事にうちこむ命とはのみいのち」

という御歌がこの間の消息を最も雄弁に語るものと、ありがたく拝まれます。

△特集▽ 子供と家庭と信仰

Ⅱその一Ⅱ



掛け橋は家庭で

内山 憲 尚

(東京品川・聖美幼稚園長)

ぼくの故郷は伊予の宇和島市の隣りの吉田という小さい町で、ここに小学校三年までいました。

主として面倒を見てくれたのが祖母でしたがたいそう仏教信者で、勿体(もったい)ないというのが口ぐせでした。

食事の時でも嫌なものをのこすと「勿体ない」といつてたべるまで何回でも出します。ご飯つぶ一つぶでもの

こすと「勿体ない」と言つてたべさせられます。

ものを粗末にすると「勿体ない」と言つて叱られます。教科書を畳の上へ置くと「ご本は大事な勉強をするものです勿体ないからちゃんと机の上へ置きなさい」と注意をされます。

「勿体ない」祖母の毎日の教育は、食物に好き嫌いを言わない、ものをそまつにしないしつけをぼくの身体にしっかりつけてくれました。

ぼくが今日、食物に小言を言わず好き嫌いがなく、残さずに食べられるのは、祖母の「勿体ない」の教育のお陰でありましょう。

小学校四年の時大阪の父母たちといっしょに暮すことになりました。母は真宗仏光寺派の寺の娘で「殺生」ということをやかましく申しまして、蟬やとんぼでも殺すことをいしました。蟬やとんぼを入れる大きな虫籠をくれまして、その中へ入れさせます。夕方になると「さあご飯にしましょう、蟬さんもとんぼさんも、おうちでご飯の用意をして待っていますから、ちよっとおうちへ帰してやりましょうね」と言って蟬やとんぼをにがしてやることもありました。

母はよくお話をしてくれました。昔話、民話、ジャータカの話でした。

入学した中学校が上宮中学です。教校から中学になったばかりで初代校長として東京から赴任して来られたのが藤田寛随校長で、修身を教わりました。

毎日二十五日には宗門子弟のために講話がありました。一般の生徒は参加しなくともよいので、剣道に熱中していたぼくは、一回も出たことはありませんでした。

中学を卒業して、東洋紡績本社の事務に入りました

が、仕事の上のなやみや病氣になったりしていろいろな迷いに出合いました。

大正九年十二月三十一日の夕、今宮の釜ヶ崎視察を思い立って出かけました。木賃宿の四畳半に横になっていると、壁一重の隣りの声が手にとるように聞こえます。仕事にあふれて帰ってきた父親と八、九才と十才位の兄弟でしょう。

「ちゃん（父さん）お餅、買って来たんか」

「今日も仕事あれへん（無い）がな、餅買うお金ないが……」

「あした正月やがなどうするんや……」

「餅なんか食わんでもええが……」

これを聞いて、胸のせまる思いをしました。「正月に餅一切も口にできない子どもがあるのだ。何という気の毒なことだろう。こんな子どものために働かせてもらおう」と決心したのです。

ちょうど、大阪浄土宗四恩報答会という会がこの釜ヶ崎の真中に四恩学園という小さいセトルメントを建築中でしたので、そこへ入れてもらってその仕事を手伝わせてもらおうと考えまして、藤田校長にたのみに行きますと、直ちに同会理事の長谷川順孝師松浦春濤師に紹介

していただいて、まだ壁土の生乾きの四恩学園へ泊り込んで不就学児の夜間教育を每晚続けました。

ここで痛感したことはこどもの宗教教育であります。

こどもに宗教教育をする前に自らが信じなくてはならない——そこで浄土宗にぼくの人生の道を求めました。

二

念仏の手ほどきを受けたのは長谷川順孝師でありました。成道寺の念仏の会、青年会に参加させてもらいました。同時に童話の導きをうけたのは大阪浄土宗お伽団で、ぼくにとってでは忘れることのできない大きな力であります。

四恩学園の仕事を一年半ばかり手伝わせてもらいましたが、こどもの仕事をするのには専門の勉強をせなければならぬことを感じ、大正十一年の三月四恩学園を辞して上京することになり、梅田駅（大阪駅）を立つ時長谷川先生たちに交って四恩学園の生徒男女五六名が見送りに来てくれました。寒々しい三月の駅のホームに羽織も着ず足袋もはかず、縄のような帯を締めた子どもたちが汽車の窓にとりついて、

「先生、勉強したら又帰って来ておくんはなれ」

「先生、身体をだいじに……」

「病気になるんように……」

と心をこめてのことばに、ぼくはハンカチを目にあてたときは顔をあげることもできませんでした。

ぼくがこんなに慕われるわけはありません。仏さまのおなさけ、お力に心をうちむけているのです。

ぼくは心にちかいました。「一生涯をこどものために捧げよう」と。東京では深川の伯父の家へ落ちつきました。

ありがたいことに、四月から増上寺日曜学校のお手伝いをさせていただくことになりました。

大正十二年の大震災で深川の家を焼かれましたが、三年には増上寺保育所の手伝いを、十四年にはこれを明德学園幼稚園として、増上寺社会部長戸松学瑛師をたすけて、保育の仕事に専念させてもらえるようになり、仏恩のありがたさに毎夕黒本尊の前にお礼の念仏を唱えさせてもらう日が続きました。

昭和十一年十三年と増上寺で加行を受けました。まがりなりにも浄土宗の教養のことがわかりかけて来ました。

藤田寛随校長には中学卒業後もいろいろご指導を受け、昭和八年アメリカへ視察に行く際にもいろいろご協

力をいただいていたが、先生の教育的信念には多分の感化を受けました。先生のお目の黒いうちに、お弟子にしていたらこうと、昭和十五年十月先生について得度を受けて仏弟子の末席に加えていただきました。

三

ぼくは寺もなく、人を濟度することできません。ただ、一介の幼児教育者として、毎日を園児といっしょに暮らせてもらっていることによるこびを感じておるだけであります。

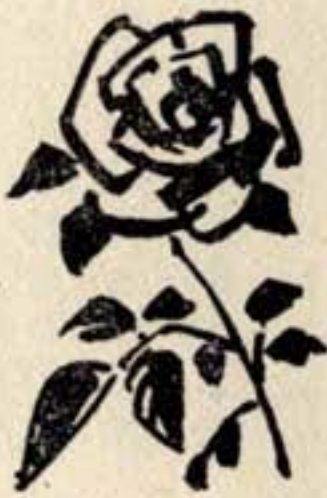
しかし、道を求める気持だけは持ちつづけています。仏子をお預りして、幼児のために、毎日毎日暮らせてもらうことのよろこびだけは人にまけずに持ち続けて

います。

今日の生活に光をよろこびを感じています。考えて見ますと、ぼくを仏の道へ入る掛け橋となってくれたのは、幼時期における祖母と母との毎日の導きであり、青年期にそれがよみがえって来て、上宮中学を出て、浄土宗の恩師のお力によって、その橋渡しをさせていただくことができて、七十才の今日まで毎日をよろこびの生活をさせていただくことになったのであります。ありがたいことです。もう余命いくばくもないでしょうが、死ぬまでこどもとともにすごさせていただきます。仏さまとともにすごさせていただきます。ありがとうございます。

＝そ の 二＝

心 親



鈴木 霊海

(群馬県太田市大光院住職)

ヨタカという鳥がいます。名前は一寸いかめしいので

すがタカの一種ではなく、タカに似た羽色をしていて夕

方又は未明に大口をあけて飛び乍ら昆虫を吸い込んで捕えるので、一名蚊吸鳥ともいうそうです。鳴き声はキヨキヨキヨキヨキヨキヨという単調な声ですが一抹の哀調を帯びていて、一度聞いたら忘れられない印象に残る鳥です。初夏の頃大光院の裏山あたりに来て鳴くので、ああ夏だなと季節感をしみじみ味わう懐かしい鳥です。

此の鳥について面白い経験をしたことがあります。大分前まだ私が学生だった頃ですが、父の病氣静養の供をして四万温泉に行っていたことがありました。滞在中よく一人で近くの山道を散歩していました。或る日、よく晴れた午後、例によって足の向くままに歩いている中に山の南斜面の杉の伐採あと地に出ました。小高い所で見晴しがよく、一息入れようと思っていると、突然足許から異様なものがとび出しました。バタバタと、飛ぶというよりこけつまろびつといった形でかなり大きい褐色の鳥が逃げ出して、五メートル位先で止って羽をひろげたままハアハア言っています。よく見ると紛れもないヨタカでした。こんな昼日中何でとび出したか、羽を痛めているのか、怪我でもしたのか、確かめようと思って一メートル位に近づくと、又バタバタと騒ぎながら逃げて、

少し行って止ります。そんなことを二、三回くり返すと、急にパッと飛び立って、見事な飛翔で遙か下方へ滑空して行ってしまったのです。欺されたと気がついたのはその時で、すぐに最初の地点まで戻って、巢はないか、卵はないか、雛でも居ないかと探して見ましたが、とうとう何も見つかりませんでした。

鳥の本などで読んで、チドリの種類には擬傷ということをするものがいて、外敵が巢に近づくと親鳥は巢から出て、わざとバタバタと怪我でもしているように振舞って注意を引き、敵を巢から遠くへ引離すということは承知していましたが、まさかヨタカがそれをやるとはという意外さに呆然としながら、あのこけつまろびつの命がけの演技を行なった必死の母性愛か父性愛かに打たれて、もっとよく探せば何か見つかったかも知れませんが、ヨタカ親子の多幸を祈って勿々にしてその場を立ち去りました。それから二十数年も経過して私は四人の子の親としての自分を顧みて、あの時いいものを見たという気持ちを強くしています。

私の母は五年前に七十九才で世を去りましたが、気性の勝った人で、語弊があるかも知れませんが、女には勿体ないなどと人から言われる位正邪の区別の厳しいしっ

かりした人でしたが、その反面誠に情愛濃く、特に私共子供達のためにどれだけ身を犠牲にして尽したか計り知れません。そんな母が関東大震災の時の話をしてくれました。その時私は数え年四才でした。地震が納まって後あちこちで火の手が上り危険になったので皆で上野の山へ避難したそうです。そこで混雑の中でどうした事か、女中さんに手を引かれた私と母達とが離ればなれになっってしまったそうです。母は半狂乱になって探し廻りました。その中近所の人に出会って、それなら女中さんと日暮里の停車場に居ましたよと教えられました。浴衣の裾をからげ、一才の弟を背負い、七才の姉の手を引いて夢中で駆け行って行ったそうです。母が「坊やア、坊やア」と声を限りに探し廻るので姉が恥かしがって、「お母さん、あんまり大きい声を出すと見っともないわよ」といってそっと袖を引っぱったので、「何をいってるの。あんたも一緒に呼びなさいッ」というと、それでも声を張り上げて「坊やア、坊やア」といったそうです。その中パッと私の着ている浴衣が目に見えて、その時の嬉しさといったら何といったらよいやら。それにしてもあの大勢の中でよくあんたの浴衣の柄が目にとびこんだものね。ああいうのを一念が通じたというのかしらと話してくれ

ました。正しく子を思う一念が仏天に通じたものと、しみじみ母の愛の有難さに感泣するものであります。

子を思う親心といえ、大光院開山吞竜上人は子育て吞竜さまとして尊信され、我が身を捨て、孝子を救い、多数の貧児を救済されたその遺徳を慕って、子供連れの参詣が多いのが特色ですが、時折熱心にお百度を踏む人の姿を見かけます。何を願うか、その多くは病氣平癒の願掛けですが、中には三日或いは一週間毎朝お百度参りする人や、雨の中を傘もささずに裸足参りする人もあって、そのひたむきな姿に親の愛の切なさが痛い程よく分ります。

人の願いというものの中には随分自分勝手なものがあるが、他人の犠牲の上に立つ修羅道の繁栄を希うものさえありますが、子供の健康や無事成長を願うということは誰憚かる所のない願望で、仏菩薩が何のためらいもなく御加護を垂れ給う所以であると私は考えます。

大光院にはお弟子入りという制度が伝えられています。これは吞竜上人御生前の故事にならって幼児を七つ位まで吞竜上人の御弟子として登録し、その間の無事成長の御加護を願うものであります。当山ではお弟子の連名簿によって日夜無事成長の祈願を宝前に勤修し、親は

我が子にして我が子に非ず、呑竜上人よりお預りしたる子供なりと心得て大切に養育し、子供は毎日日課として三十遍以上念仏するよう、若し幼少にして唱え難い時には、親が代って申すように奨めるのであります。

元よりこれは三十遍或いはそれ以上と数遍を切った念仏それ自体の功用によってその御子が現当二世の利益を受けるとするものでなくて、阿弥陀仏の本願不思議の御力、親心によって救われるわけで、唱えれば救われるという嬉しさに、唱えずには居れぬ気持から南無阿弥陀仏と申せと教えるのであります。

思うに此の阿弥陀仏の親心―慈悲―程広大無辺なもの

はありません。親子の愛、夫婦の愛、友人愛、隣人愛、同志愛、同胞愛、人類愛等々どれを取っても尊く美しく強くないものはありませんが、阿弥陀仏の親心はその全てを包含した広大にして無条件な絶対愛です。阿弥陀仏の御前では親も子も夫も妻も、老いも若きも敵も味方も鳥獣虫魚の類に至るまで生きとし生けるもの全てが同じ仏の御子として平等であります。一切の差別なく皆共に光摂を蒙る所に争いや不安の宿る筈はなく、安心があり歡喜があります。私共は此の広大にして無辺の親心を早くキャッチして、申さずに居れぬ念仏の功德によって常に明るい生活を送って参りたいものであります。

Ⅱその 三Ⅱ

黒田 昌史

(宮城県仙台市在住)



二十二年目の五月人形

山は雲町は八重たつ幟のぼりかな 也有
相伴に蚊もさばきけり菖蒲酒 一茶

こんな句が浮んでまいります董風かよう端午の節句を迎える頃々ですが、久しぶりに家庭に帰り、ことさらす

がすがしい感じがいたします。

と申しますのは、一年半あまりの闘病生活の末、ようやく退院できたためです。高等学校入学以来、管楽器に魅せられ、その後大学に進んでからもクラリネットをふきつづけたのですが、合宿・全国に渡る演奏旅行などの無理がたたり、遂に気管支を病らい入院を余儀なくされたのでした。

それにいたしましても私の二十二年間の歩みは病気と共に歩んできたようなものでした。それでも生れて一年後には健康優良児として表彰された程ですが、小学校へ入学する頃小児結核にかかり、小学校三年の初めまで薬餌療法を続けたのがけちのつけはじめでした。この時は家から山越しに歩いて二十分程のところにある療養所にかよふのがいやで兄や姉をさんざん手こずらせたものでした。しかしまさか十五年後にここへ入院するとは思ってもよらぬところでした。

この病いがようやく癒えた小学校四年の秋、先に用いたペニシリン注射の影響で左足の大腿部の筋が緊縮するという奇病にかかってしまいました。姿勢を正してもパングラフのような形になってしまったのです。このまま放置しておくと左右の長さは同じでも歩行に支障をき

たすとのこと、手術をしざるを得なかったのです。今でも左足に十数センチの傷跡を見るにつけ、その当時の何んともいえない痛さが思い出されてまいります。

こうしたうちになんとか小学校は卒業したのですが、中学校へ入学して間もなく今度は子供には珍らしい胃潰瘍となってしまうたのです。この時は子供ということでは手術はせずに薬餌療法を用い、初めの一ヶ月半あまり入院し、その後中学校卒業までの三年間続け、ようやく全快することができました。

そのあとの高校生活は私にとっては珍らしくたいした病いもなく過すことができました。病いは気からということばがございますが、人一倍病気に敏感にならざるを得なかった私でしたので、高校時代はちょっとした身体の変調でも病院に駆けこんだ程でした。それでもなんとか自信が持てるようになり、前にも述べましたように好きなクラリネットを習いだしたのですが、あげくのはてが過労による肺結核のための入院となってしまうたのでした。

このように私はわずか二十有余年のあいだに大病を四つも背負ってしまったのです。家族との談合の折によく出るのですが、私は四人兄弟の末っ子ですが、家中の病

氣を自分一人で受け持ってしまったようで、他の三人はこれといった病いもせずに暮しております。ことに下の兄などは病院に行っただけで貧血を起してしまいう程、病いとは全く関係なく過しております。

何故に私だけがこのように苦しまなければならないのかと思ったりすること常でございましたが、そう思ってみたところで仕方がないことなのです。仏教でも人の苦しみの中、四苦八苦の一つに病いを数えているそうです。が、この苦しみは病んだことのある人以外、分りようがないのです。もうこんなに苦しむのなら一層死んでしまった方がよほど楽だろうと子供ながらに考えたこともしばしばあった程ですが、それとていろいろ心配してくれる家族の顔を見るにつけ、何んとか勇気づけられて今日に至っております。

こうして私が退院してまもなく甥の初節句の話が話題に出、五月人形を買うことになったのです。最近はい事が派手になりましたが、私の生まれた終戦直後は、物資が不足していたためもあったでしょう。またひがみにも聞えましようが、上の二人の兄にはその時代のものである立派な五月人形をそれぞれ買い、また祝ってもらっております。しかし、どうした訳か私にはそう

したものが何一つなかったのです。

別に自分の五月人形がないからといって、たいした問題でもありません。ましてや縁起ものですから、それ程気にすることも無いように取れます。

しかし、私にとっては縁起ものであるからこそ、今になってことさら五月人形、自分のための五月人形を求めたいという気がしてならないのです。別に五月人形を持っていたならば、それまでのいろいろな病いにかからずにすんだとはいいいません。だが、何かしらそんな気持ちにさせられてしまったのです。

何故に私がこのような気持ちをもつようになったかと申しますと、丁度私が入院していた病室に五十七才になるお坊さんが入院していたため、機会あるごとにいろいろな話を聞いたためです。その折々に出てくる縁起ということばの響きが何んともいえぬものでありましたので、何かそんな気持ちになっていったようなのです。

この世を形づくる人、物すべてが縁あって今ここに存在し、そのものが縁あって隣り合い、縁あって喜怒哀楽を共にする、この縁あって起きるさまざまな事象、これが人の世でありますよ、というこのお坊さんのいう縁起ということばに魅せられたものでした。

確かに私の周囲を見渡しても、私を中心とした円のうちそとに縁ある人が存在し、また私も他の人からみればその人を中心とした円のうちその一人である訳です。考えようによっては大変複雑なものですが、この世に存在する人、一人一人が縁あって結ばれており、同心円となつて社会が形づくられている訳ですから、私たちすべては縁者なんだという何か心が大きくさせられるような心地がしてまいりました。

しかし、そのお坊さんの話しにもありましたが縁があり縁が強ければ強いほど、そこに欲が生じ、無理が生じて悲劇となる可能性が出てくることも考えねばならないという一面があるとのことでした。この話しは私には仲々理解しにくいところでしたが、私なりに解釈して、それは人は親しくなればなる程、遠慮というか控え加減にものを見つめる気持がうすれ、我執が前面に押し出され無理強いにことを運ぼうとするためではないかと考えたのです。

この我執、つまり自我意識が良い方向にむいているときは、それはすばらしい人生となるでしょうが、ひとたびつまずきますと、それはみにくい姿となつて人々から排斥されないと限りません。

病氣の話しからとんでもない方に筆が進んでしまいました。したが、私とて健康でいたときは少し程の困難は苦ともなりませんでした。しかし、いくら子供のときとは申せ、病氣にいくたびとなく繰り返しますと、そのたびごとに何か目の前がまっ暗くなつてしまったことを覚えております。友だちが元気よく駆け廻っているときも医者の忠告で校庭の隅で一人ぼっちでその様をながめている位、つらいことはありませんでした。

こうした私の病いと闘いともいえる生活に一つの光明を与えてくれたものがございました。それは信仰深い祖母の手に引かれてたびたびかよつた檀那寺で、何んのことか分らずに掌を合せ、お詣りしたことです。

こんな私の半生ですが、この際に病魔を断ち切ろうと、一つ縁起をかついで甥の五月人形を買い求めにいった折、小さいながら隆々しく立つ白馬を求めました。今後がうまくいくようにと、大地にしっかりと立ち天高く嘶く、その中でも白い純真無垢な馬にあやかり、一から出直す覚悟で、より良き人生、よりよき仕合せを願つて、今更とは思いましたが、一大転機となるように、実に二十二年目の五月人形を手にした端午の節句を迎えております。

十二因縁

—その5—



後生の恐れ(六入)

(長野県茅野市心光寺住職)

渋谷 賢 応

無明と行とに本体論的因果関係を学び、識と名色とに同時相互因果の認識論的な因果関係を学びました。これらのものは、また同時に相関の關係にあり、立場を替えて事象を見る物の認識方法よりの識別とも解せられることも学びとてまいました。

現に六入(六処)より始まる触、受、愛、取、有の六つの概念は、連続した心理的な慾望の複合化の因果として了解すべきものと思うのです。この慾望の進展していく過程の考察は、十二因縁中の他の概念の大まかさと異って、実に緻密に内省しておられると思いますし、それだけに人間の内的な輪

廻の姿について絶妙と申さなければなりません。

さて、その第一の起点といたしまして六入が挙げられます。このことはまた六処とも六根とも申されまして、眼、耳、鼻、舌、身、意の六つの感覚器官を言うものでして、人間が外界を感受する六つの窓とでも申しましょうか。この六つによって、その対象となるものを六境と申し、色、声、香、味、触、法と言うことになり、対応せしめて、眼には色、耳には声、鼻には香、舌には味、身には触、意には法、となっているわけです。この分類方法は、現代の心理学におきましてその基礎となっているものでして、洋の東西を問わす、人間の常識として当然考えられるべき帰結であるとも申せましょう。

ただこれを、単に感覚器官とその対象というように受けとめるだけではなくて、これを人間が迷界を彷徨する端緒になっているのだと受けとめる所に仏教的な特異性があり、お釈迦さまのご苦心がしのばれるわけでありまして、異性を見ることによって心迷い、異性声を聞くことによって心迷い、異性の香りを嗅ぐことによって心迷い、異性の味を味わうことによって心迷い、異性の肌に触れることによって心迷い、異性の関心を買うことによって心迷うというように解説すれば、この人間として不可欠の六つの感覚器官が、いかに迷界

に入る門となつてゐるかが容易にうなづかれるというものです。

まことに人生はこのことによりて立ち、このことの眞実性をあやまることによつてあやまちを犯し、このことの衰えによつて老いゆくことは、私たちが現実に体験いたしております事実を直視しても明白の理と申さなければなりません。

○

百喻經に次のようなお話がございます。

「昔、一人の女の人がありました。大変重い眼病をわずらつておりました。もの知りの友人が訪ねてきて申しました。

『あなたの眼は大変痛みますか』その女の方は言いました。

『眼が痛くてしかたがございません』するとその友人の申しますには『眼があれば必ず痛むものですよ。どうしても痛くて我慢できないというならば眼を抉り取ってしまったらどうでしょう。そうすればもう痛むこともございますまい』これを聞いた近所のおばさんがつぶやきました。『ほんにまあ、かわいそうなことを言う。眼がもしあればそれは病むこともあるだろう。病めば痛いにちがいない。けれども病まないこともあるだろう。そうすれば痛まないときもあるはずだ。もしここで眼を抉り取ってしまったならばその傷も一生痛むだろうし、見えないと思えば心も一生痛むにちがいないのに』

六根はそれぞれ迷の門であり、病の門であり悩みの門であるわけです。悩みつゝのり、痛み重なれば、六根を断絶するにしかずとさえ思ひつめることでしよう。事実、古来迷いを避けて眼を抉り、女色をなげいて男根を断つた修道者もおられたわけでございます。しかしながら、六根はあくまで迷の門、病いの門悩みの門であつて、六根そのものが迷いでも病いでも悩みでも何んでもないわけでございます。迷うからといってその根元を忘れてその門を絶ち、病むからといってその根元をそのままにその門を閉し、悩むからといってその根元をさしおいてその門を破つても解決にはならないわけでございます。

としますと、六入の迷いは六入にあらずしてその内にあると同様、この迷いからの離脱も六入にあらずしてその内なるものの救いでなければなりません。

○

法然上人のご伝の中に有名な熊谷蓮生坊入信の次のくだりがございます。蓮生坊とは人も知る武蔵の国のご家人熊谷の次郎直実、平家追討のときには所々の合戦に名をあげ、一ノ谷の合戦には敦盛の首を泣く泣くはねた武勇も情愛もともに備えた強の者でございましたが、後、宿善のもよおしによつて心をおこして出家し蓮生と名をあらため、聖覚法印にと

なわれて法然上人のご庵室を訪ねたのでございます。

「罪の軽重をいはず、ただ念仏に申せば往生するなり、別の様なし」との給うを聞きてさめざめと泣きければ、けしからずと思ひ給いて物ものたまわず、しばらくありて「何事に泣きたもうぞ」と仰せられければ「手足も切り、命をもすててぞ後生はたすからんずるとぞうけ給はらんと存ずる所に、ただ念仏に申せば往生はするぞと、やすやすと仰せをうけたまはり待れば、あまりにうれしくてなかれはべる」よしをぞ申しける。

鎌倉殿の下知とは申せ、所々の合戦にいく多の人をあやめ、齡は我が子小次郎程の御曹子、客顔美麗の敦盛の首をはねた直実にとって、後生の救いは絶望に等しかったのでございましょう。首かき切ったこの手をもぎり、人馬を蹴散らしたこの足を断ち落されてもなおあき足らぬ程の罪悪感にもだえながら上人の庵室の戸をたたいたに相違ございませんと。ところが上人のお答えは、

「罪の重い軽いは問題外です、ただお念仏さえ申せば往生できるのです。このほか何もないのですよ」

こう言われて蓮生坊は頭を垂れました。しんと静まりかえった庵室に音一つない時が流れました。しばらくして蓮生の落す涙の音がぼとぼとと床を打ちました。

「どうして泣かれるのですか」

「我が罪の深さに、手足を切れ、命を捨てて罪を滅せ、そうしてこそ後生が助かると申されると思いましたのに、ただ念仏申せば救われるとやすやすと申されるのを聞きして、あまりにうれしくて」

あとはただ蓮生坊の号泣の声のみあたりをふるわせるばかりでした。

迷界よりの離脱は六根を断つことではない。その根元にある内なる無明、識を断つことでなければならぬ。無明即断の本願念仏こそ、それよりの救済の最上の道である。上人のお考えの中にはこの理路整然たる道理あってのおさとしたに相違ございませぬ。

しかしながら蓮生坊は、我が身にふりかえってそのことがあまりに尊く、この上人の一言をもって罪障ことごとく霧散する想いであつたのでしよう。

罪の意識の稀薄な私たちは、これをただ蓮生の昔語りとだけしか受け止めることができません。あまりにやすやすと申されるお念仏のご利益について、あまりにやすやすと受け止めていることを恥かしく思います。ただお念仏を申しさえすればそれでいいと言われることが、どれ程重みのあることかも知らずに。そのかわり、蓮生ほどのよろこびも、淨い涙も身にしみて味うことのできない私たち。さびしいことです。

教 済

と

仏 經



浦 上 明 久

(北海道檜山郡江差町在住)

一

仏教と経済とか、信仰と経済という場合、全く対蹠的に問題であり、唯心と唯物、精神と物質、物と心との問題であります。仏教は全く出世間的な問題であり、経済は金銭上の、もっとも俗的な世間的な問題とされているものであります。

果して、この二つの問題は、全く相對するものでありましようか。いな、決して相對立するものではなく、表裏一体たるべきものではないでしようか。いかに信仰の人であつても、経済生活なくしては、一日の存在も許さないのであります。

「衣食足りて礼節を知る」とかいふのと、「道心の中に衣食あり、衣食の中に道心なし」とは、伝教大師のお言葉ですが、これは同じ意のことがのべておられるものと思われま

す。
「衣食足って礼節を知る」といっても、経済がまず第一

で、信仰がその次であるとする議論は、当を得ていないのではないでしようか。衣食たるがゆえに礼節を知り、礼節を知るがゆえに衣食が足るのであります。仏教のおしえは、このように説かれています。

まさしく、道心によって衣食の足るを知るのであつて、衣食のあとに道心を得、礼節を知るのではないのです。衣食の足るを知るのは、信仰によってのみ知りうるもので、信用生活が、経済生活をして、眞実たらしめるものであります。眞の経済は、信仰の基礎の上に成立するといふことができます。

物をして、眞実のものたらしめるのは、物そのものではなくして、物を見る眼であり、その心であります。「猫に小判」といわれるのは、このことでありましよう。物をして千金の価値を持たせるのは、その人の心によるものであり、従つて物と心の関係、仏教と経済との関係も、同じように言われるのであります。

ある高僧が、廊下を歩いていて、紙切れの落ちているのを見て、「御法領のものをあだにするかや」といわれて、両方の手でおしただいたという話があります。ただの打ちすてられた紙切れも、信仰の眼からは、全く両手でおし頂く価値のあるものと変化するものであります。

山海の珍味も、不平や不満の心では、何の御馳走でもありません。身につまる心配事のあるときには、少しの味も味うことはできません。楽しい一家だんらんの夕餉には、そんなに御馳走はなくとも、どんなに楽しく、どんなにおいしく頂かれることがありましょう。信仰生活が、どんなにか、日々の経済生活を価値あるものにするかは、全く驚くべきものがあります。

二

一般庶民社会の金融機関に質屋がありますが、これは実は、仏教から出たものであります。

鎌倉時代の末から、南北朝時代および室町と、ながい間にわたって、京都に繁栄した質屋業は、実は叡山の僧侶の経営したものであったと聞けば、いま更ながら、当時の叡山勢力に、一驚されることでしょう。当時、これらの質屋の山僧を土蔵法師とも、または、「坊主」ともいわれたようであります。土蔵法師とは、質屋には必ず質草を納めて置く倉、すな

わち土蔵が設けられていたもので、この質屋の僧を土蔵法師とよばれたのです。

そもそも、出息、すなわち利子付きで、金銭を貸しあたえる金融事業は、決して日本で始まったことではなくインドや、中国においても、すでに早くからおこなわれていたことであり、このことは、仏教の律典のなかにも規定されています。すなわち無尽財といわれるのが、それであり、中国においては、無尽蔵院として有名であり、日本においても、無尽とか、無尽講とか、または頼母子講といわれ、更に普通の質業となっているものであります。

律典には、僧伽のためならば、利潤を求めてよい、と世尊が説かれており、このために信心のパラモン居士等は、仏法僧のための故に、無尽物を施し、これを廻転して利を求め、この利物をもって三宝を供養する、と説かれています。すなわち三宝に供養せんがために、利を求めるのであり、私利私欲のために利を求めることは、いづれの場合においても善ということとはできません。

インドにおいては、この利子付きの貸借は、いわゆる抵当、質草をいれておりますが、中国においておこなわれたかの有名な三階建の無尽蔵院の貸出しは、質草はもちろんのこと、はじめはおそらく無利息で貸し出していたようでありま

す。無尽蔵院は、日本における初期の頼母子講のように、全く慈善救済のためであったのです。困窮せる人々を救わんがためのものでありました。

寺院が無尽を経営するということも、僧尼が質業をおこなうことも、みな仏の大悲のあらわれであり、如来の行が、自己の行となって、ここに如来の慈悲身が、いわゆる衆生即ち我々の慈悲行となるのであります。仏の大慈の現われが、無尽講となっておこなわれたのです。

これは、やがてお念仏のなかに、日々の懺悔と、感謝報恩の生活へと展じてゆくのであります。

このように、無尽は、信仰の一表現であり、無行にして大行である念仏の実践化ともいうことができましょう。

無尽は、このようにして、仏教の言葉であり、律典から出でおこなわれたものであり、中国や、日本においては、全く仏の大慈の顕現として、貧困者救済の慈善事業であったのですが、いつでも弊害はつきもので、このような尊い経済機関も現在の質屋のように、遂には当然の利子を取るようになり、さらに高率な利息を付ける高利貸的な存在となってしまうのであります。

三

かように、仏教は多くの営利事業に対してすら、それが三

宝のためならば、あくまでも利を求めてよいとされているのですが、その三宝のためということは、さらに展開して私利私欲の追求のための営利ではなく、あくまでも、公共の名のものであり、それが利他行のものであるならば、営利行為は、これを許しているのであります。

このことは、あらゆる商売にも適用されることであります。人びとが、いたずらに他を顧みずして、ただおのれ個人のため、自分の栄華栄達のために、利益追求のみに奔走するとしたならば、それは、決して賞められるべき行為ではないでしょう。

釈尊は、心地観經のなかにおいて、一般在家の人びと、すなわち比丘以外の営業者の経済生活について、財産の取りあつかい方を、つぎのようにおしえています。

財を四分して、一は息利して、即ち資本を投じて営業費となし、一は毎日の生計、即ち家の生活費となし、一は孤独者、即ち孤児や一人ぼっちの老人などに布施することとし、一は一族やその他の救済の臨時費となすべしとされています。

かように、仏教では、自分の営業が決して私利のためではなく、公共のものであり、利他行のものであるとし、仏教における経済問題は、信仰の上に成り立つ経済こそ、真実なる経済観ということができましょう。

願 発



杉 本 修

(横浜市立共進
中学校教諭)

最近、マスコミをとおして、葬式無用論という記事をよく目にすることがあります。現在の葬式の形体をいろいろの面から見、広く各分野の人々の意見を聞いてみると、私たちも今後真剣に考えていかなければならない点を多く含んでいるように思えます。ただ無用論をとなえている人々も、祖先を敬い、死者に手厚い追善回向をするということは共通している考えのようです。これを逆にみるならば、祖先を敬い、追善回向をするという気持が、形となって表わされてきたのが無用論者の無用たる根拠となっている現在の葬式の形体ではないかと思われまゝす。

私の勤務している学校の同僚に英語の教師

でSという先生がおります。彼は三十才をこえた独身で、お母さんとの二人暮らしの家庭でしたが、お母さんは昨年十月病氣のため突然なくなられてしまいました。彼は形どおりの葬式をすませ、昨年の夏改築した広い家でお母さんの位牌とのたった一人の生活になってしまったわけですが、看病、葬式という一時の混乱もおさまり、次第に家も、彼自身も落ちつきをとりもどしてくると、『ある種の何ともいえない不安が心中に宿るようになってきた。』ということでした。話し相手もいない家で位牌の前でお母さんの写真を見ていると、何かこわさのようなものを感じる。母親の生前中彼の家庭がどのようなものであったか知る

わけもありませんが、『勤めを持っている男手で、十分な看病もできなかったような気がする。病院で寂しく他界していった母が、極楽浄土に大往生を遂げることができたのだろうか……』彼の不安というのはこのようなものであったようです。『はじめはお母さんの部屋で位牌を守るように寝ていたが、どうも不安が胸をしめつけ、よく寝ることもできない。眠らぬまま朝を迎えることも数が多くなる。知らない間に自分の気持は、その母の部屋をさけるようになってきた。』

こうなるとこの部屋だけでなく、自分の家でありながら自分の家ではなくなってくる。自分の他に何か気にかかるものがその中に一

緒に住んでいる。一日の勤めを終えて、安心して帰るはずの家が、こういう状態で、家に入ることもすがすがしい気持ちの悪いことに思えてきてしまう。『こうした心境がある日、私にしみじみ話してくれました。』

そこで彼がその打開のために思いついたことは、お母さんの追善回向は檀那寺の住職に任かせておくのではなくして、自分自身で回向することだ。どんなにまずくてもよい。朝に晩に自分が経本をとり一心に回向することが最も大切なことだろう、ということに気づいたのです。そこでさっそく檀那寺に行き、一冊の経本を受け私がそのコーチを依頼されたわけです。他宗の經典のことでもあって私も十分に教えることもできませんでしたが、經典にむかう時の一応の心がまえ、釈尊の教えの一部をお話しする機会を持ったわけです。

その後、彼は新しい仏壇と位牌をととのえ朝は暖かい御飯を供え、朝に夕に読経、合掌す

ることが生活の一部に加わっていったようです。今までは、位牌の前で手を合わせても、ただ写真とにらめっこしているだけにすぎなかったものが、朝に夕に接している經典は死者のためのものであるばかりでなく、生きている私たちが、より人間らしく生きていくための教えであることにも気づき、興味を持つようにもなってきたようです。最近、彼がどのような気持ちで家に帰って行くか、どのような気持ちで母親の写真と接しているかは聞いてもみませんが、以前のような不安は口にしなくなりました。必ず浄土のお母さんは息子の一心な気持ちに満足して、にこやかに家の中に明るさを放っていられるものと推察しております。

最近、私は彼と一週間程奈良、京都に旅をする機会を得ました。南大和、聖林寺、室生寺、長谷寺、飛鳥方面、浄瑠璃寺、岩船寺など静かな山にいだかれるようにして建っている寺々を参拝してきたわけですが、諸仏に接する彼の表情は、観光客の持つそれではなく、十一面観音の諸顔の表情を、千手観音の

諸手を、阿弥陀如来、釈迦如来の印相を、明王、天部の様相を、それがどういうことを表わし、どういう意図で造作されていたものか、常に鋭い質問となって私の耳にかえってきました。時には早く旅館に帰りたいと思つた私の気持ちも彼の熱意に動かされ、連日暗くなるまで、仏像を求めて歩きまわりました。彼は次第に釈尊の慈悲深い教えに入りこんできているように思えます。『愛別離苦』肉親とのつらい、悲しい別離、この事実が一人の人間に今までなかったものを芽ばえさせたのです。仏教から人生の哲理を学び、至らぬ私達を種々に変化して時や場所をいとわず暖く迎え、見守ってくれる諸仏、諸菩薩に心中より合掌をすることができるようになる。ここに生き生きとした仏の教えが存在することになるのでしょう。

葬式有用、無用外部で論議することも悪くはない。しかし、釈尊の教えを知り、諸仏に手を合せ、自分の親を祖先を心にいだいた時、自らその方法も判断がつくことだと思われ。

《ハガキでひとこと》

子供の日に因んで



老の童心

水谷大成

(愛知県豊田市法雲寺住職)

沢田岳潤

(静岡県裾野町専修院老)

昭和の初めから青少年運動を仏教各宗が盛んに始めだした頃、特に浄土宗児童協会が組織せられて、常任理事として内山憲尚・山田巖雄・高橋良和先生方に小生も加わって、僅か年間千五百円の宗費補助を受け、数万の補助のある宗派をリードしていた子供党の熱あるあの頃を思い出し、現在の少年教化者に「ひとふんばつ」して頂きたいと思うことしきりでございます。

空は青く地は緑野は風かおる
すくすく伸びゆく若人の現像
鯉のほりはためき竿頭の風車
からから金属性の陽に映えひびく
すばらしい初夏の魅力
若人を祝福する日本民俗のほこり
この頃の世相
昭和の元禄 泰平の世と人よればささやく
その底辺に苦渋 貧困 闘争

地下水のごとく溢れいず

右にかたむかず左によらず

ただしい革命 進展

離辺所中こそ

みほとけの証し祖法然の言葉

夢おおき若人よ

ほんとうの人間まことの生活

そこにこそ生き甲斐

あるを知るや知らずや

老の童心くりごと

若人を愛しての手向け

ひとり浄土に縁ある若人といわず

すべての若人

このつたなき言を捧ぐ

(葵草主幹)

笠原秀定

(東京芝・明照幼稚園長)

空高く風におよいでいる鯉のほりを見ると
気持が大きく明るくなるような気がして、こども達もあのようにのびのびと丈夫で成長することを祈りたい気持ちになります。

吾々のこどもの時を思うと本当にのんびりと楽しく遊んだことが思い出されてなつかしく思います。

それにくらべると今のこどもは、特に都会のこどもはかわいそうな気がしてなりません。思う存分遊ぶ場所はない、又毎日勉強々々でのびのびした気持が見られません。余りに知育にのみ遍しているのではないでしょう。か。思いきって遊べる場所をつくり、出来るだけ自然に接し、情操ゆたかに感謝の気持を養うことを考えることが必要だと思います。もっと家庭教育を重んじ、身心共に健全な人格完成を目標にその基礎を養うようにしたいものだと思います。

古賀秀恂

(神奈川県三浦市霊川寺住職)

今年の初めより身体に変調をおぼえ、三月中旬にとうとう咯血、胃潰瘍と診断され、彼岸があけるのを待って手術をし、どうにか快方に向いつつある頃々ですが、生れて初めて

の大病かつ入院というアクシデントに見舞れた、そんな病院での一日、何か遠い思い出として残る子供の頃がひとしおなつかしく感じられました。

私の生れ育った関村は油壺の入江と隣り合わせた漁村でしたので、日常の生活も海を中心としたものでした。最近こそ、冬は温暖のため、夏は海水浴にと別荘地の様相を呈してまいりましたが、子供の頃はそれは静かなものでした。子供ながらに漁師にまじり、磯の岩場でもぐり海のさちを獲り、意気揚々と獲物をつるして帰り、その日の食膳を飾る、そんな日々を続けながら育った私は自然海が第二のふるさとでもいえるのです。

青く晴れわたった日などにはその上に雄大な富士山を映し、日暮には一面赤いジュウタンを敷きつめたかのように太陽を映す、またそんなことはなかったかのように寄せてはかえす海。こんな海を見つめながら、悲しみやさびしさをいやした子供の頃の思い出が、今こうして病後の身体を浜辺で休めていると、次から次へと走馬燈の如く思い出されてまいります。

三枝木明子

(神奈川県横浜市在住)

小さい頃より男まさりでありました私は、昔より端午の節句は男の子の祭りといわれて来たにもかかわらず、同じ子供の祭りなのだからと、変な理由をつけ、兄たちと同じように風を買ってもらい、空高く舞いあがらせたのしんだものです。間もなく始まるであろう田植の準備にいそがしいお百姓さんの働く畔みちに立ち風上げをした頃の思い出が今も脳裏に浮ぶ心地がいたします。

また、今から二十数年前の五月四日に亡くなった祖父の墓参も、どこにはなしに吹いて来る新緑の薫りをただよわせた風の中、家族連れだって行くのですが、子供ながらに人の死を考えさせられた記憶がございます。私が末っ子であったためか、他の兄弟よりも祖父にかわいがられましたので、そんな祖父の死がとてもしんどしく感じられたためだったのでしょうか。こんな思い出を胸に今年も子供の日を迎えております。

童	聖
話	典

闘争を止めよ (3)



つるた たんせん

梵達王は宮城へ戻ると、晴ればれとした顔で群臣を集めてきいた。

「汝らは、若し、拘薩羅の長寿王の児、長生王子を見つけたならばどう処置するか、いってみよ」

すると、群臣はみな思い思いの意見を吐いた。三つに斬り捨てるべきである、いやずたずたに寸断するがよい、車ざきに処せねばならぬ、火あぶりにせよ、熱油にてこれを煎るがよい、手をきり脚をきり耳をそぎ鼻をそぎ落せ、などいろいろだが、王は、群臣を見廻して、

「汝らは、これ以上、何もいってはならぬぞ」とたしなめて、傍の長生をかえりみ、

「これは、長寿王の児、長生太子である」

王の言葉に群臣はあっと驚き、その目は一斉に長生に

集った。

「汝らは、長生王子に一指も触れることを許さぬぞ」一同、不審に思っていると、

「彼はわが命をゆるし、わしは彼の命をゆるしたのである」

そういつて一部始終を物語ると、群臣はこれまできいたこともないことであると、互に感歎した。

「長生よ、おんみの父が死に臨んで『長生よ、長を見る勿れ、短を見る勿れ、長生よ怨を以って怨は息まず、徳を以って怨は息むなり』といったのは、一体、なぜかういったのか、わけを知っているか」

王は、長生にやさしくたずねた。

「はい、父が長を見る勿れといわれましたのは、長く

怨む勿れということでございます。短を見る勿れといわれましたのは、友と不和になる勿れということだと思います。長生よ怨を以って怨は息まず、徳を以って怨は息むなりといわれましたのは、大王がわが父母をあやめました理由によって、わたしが大王の命を奪いますれば、大王を尊ぶ人々はわたしの命を奪い、又、わたしのことをしのぶ人々は彼らの命を奪うでせう。このようでは、怨はいつまでも息みずまい。今は大王はわたしの命を赦され、わたしは大王の命を赦されました。このようにして徳を以って初めて怨は息むものでございます」

「まことにめずらしいことである。この王子は、極めて聡明である。なぜなら、父の略して説いた言葉の意義を、広くよく理解している」

年もゆかぬのに驚くほど聡明な童子よと、深く感動し、

「これは、全く我が罪過であった。長寿王と王妃を捕えてあやめてしまったことは、誠に申しわけない」と懺悔し、長生王子に本国の拘薩羅を返したのみか、姫を妃として与え二人の前途を祝福した。かくして両国好みを深め、互に助け合うた結果、両国とも永く盛えるに至ったのであった。

お釈迦さまは長い物語を述べ終われますと、こう申さ

れました。

「比丘たちよ、かくの如く知るべきである。刀をとり他国を攻めることを習いならとしていた昔の諸王にさえ、なほかくの如き忍辱、慈悲心がある。大きな怨を抱きながらも忍びあい傷害せず互にゆるし、却って親しく交りになしている。ましておんみら比丘は、信心を堅固にして出家し、貧欲ひきぼり、瞋恚いかり、愚痴おろかさを学んで来たものである。今些細なことのために鬭諍して互に和合をなさず、各々あい忍ぶことをなさず、悔い改めずにいる、比丘たちよ、この物語を思うて、争うことの非なることを知るべきである。譬うれば両木あい摩擦するときには火を發して自らを焚き、火は燃え広がって果しがないであらう。

比丘たちよ、止めるべきである。他の惡をあげて鬭諍すること勿れ、口論すること勿れ、比丘たちよ慈しみの心をもって一切を怨み共に和し、同ずること一の水と乳の如くして共に鬭諍すること勿れ」

ときびしく誡められました。

しかし闍那は、

「どうか世尊、法主、時を待ちたまえ、鬭諍、口論はわれらのことでございます。世尊、色々とおことばを

いただきましたが、おことばの如くには参りませぬ」

と答えて、反省の気色は微塵もなく鬨諍をやめようとはしませんでした。

「これらの愚人は蒙昧である。教誡すること容易ではない」

と嘆息のことばをもらされ、坐より起たれますと、お釈迦さまは、信者の誰一人にも行き先きを告げられずに、いずこへか去って行かれてしまいました。

行き先きを誰にも告げられずにコンサービーからただ一人で立ち去られたお釈迦さまは、波羅樓羅村へ赴かれ、

それから跋陀波羅林へ行かれ阿那律、難陀、金毘羅ら三人の比丘が、互に助けあいながら仲よく熱心に修行している有り様を見られ彼らを励まされてから、舎衛城の祇園精舎に帰られました。

コンサービーの街の人々は、お釈迦さまが立ち去られたことを知りますと、大変おどろきました。そして人々は、比丘たちがお釈迦さまの度重なる訓誡に耳をかそうともしなかったことがわかりますと、比丘たちの不遜な態度にすっかりあいそをつかしてしまいました。お釈迦さまを悩まし奉るような比丘たちには、今後は敬意を表

することをすまい。たとい街に托鉢に来てても、供養の飲食の施は一切しまいと思うようになりました。

比丘たちが街に托鉢に行っても飲食を施してくれる人は一軒もなくなりましたので、さすがの彼らも困ってしまい（われらの罪によって世尊はここを捨てられるようになったのである。われらはみんなで自分らの過を謝罪しなければならぬ）と後悔し、二派の比丘と比丘尼たちは、それぞれ別々に前後してコンサービーを出発しました。

一方、コンサービーの比丘たちが帰ってくるという噂を知りますと、祇園精舎の比丘たちの間に大きな衝撃を与え不安の色がただよいました。先ず長老の舍利弗がお釈迦さまのみ許に行き、

「鬨諍をなしたコンサービーの比丘たちが立ちもどってくるそうですが、われらは比丘たちを、どのように待遇すればいいのでせうか」

と伺いました。

「舍利弗よ、おんみは法に随って判断するがよい」

「世尊、わたしはどうして法と非法とを知り得ませうか」

「おんみは、かの二派のそれぞれ説くところをきき、

法の如く律（きりぎりす）の如來（にがひ）の説くところと同じであれば、よく待遇（たいぐ）して伴受（なぐさ）となるがよい」

「衣食は、いかにすればよろしいでせうか」

「舍利弗よ、衣食は他の比丘と同じように平等に与うべきである」

舍利弗がお釈迦さまの指示を仰いで立ち去りますと、瞿曇（ごうだん）弥比丘尼が、信者の給孤独長者が、それに婦人の信者である毗舍佉母がみ許に来てどう待遇すべきでせうかと伺いますと、それぞれの立場にあう教えを示めされました。

間もなく阿難が来て、彼らに住む住所を与えるべきでせうかときますと、住所は二派を一応別々にして与えよと指示されました。

問題を起した当の比丘は、静かなところでひとり坐禅して、自分の行為は果して罪でなかったであろうか、罪であったであろうかと、いろいろ反省していましたがやはり戒（おきて）を犯したのである。そのために比丘たちらと比丘の行事を別にさせられたのであると気づくに至りました。やっと自分の行為が戒に違っていたと気づくと、早速自分を強く支持してくれた比丘たちのところに行き、

「わたしはよく考えますと、自分に罪あることを知るに至りました。諸大徳（みなぎん）よ、わたしのためにかの比丘たちと和合して下さるようお願いいたしまする」と申し出ました。

そこで、彼を支持していた比丘らはその比丘をつれ、彼を有罪だと主張した比丘たちのところへ行き、

「この比丘は、自ら罪あることを知るに至りました。このことによってわれらの僧伽の中で鬭諍（とうじやう）を起し、それがためお互に不仲となり終に二派に分裂し、儀式も別々に行うようになりましたが、これは大きな過でした。われわれは今こそ、和合をいたしませう」と和解を申し込みました。

勿論、異論のないことでありましたので、今まで二派に分れてにらみあっていた比丘たちは問題を起したその比丘をつれ一同うちそろって、お釈迦さまのみ許にゆき、ことの次第を申しあげ、不明を幾重にもわび指示を迎えました。

こうしてお釈迦さまのおさとしによって、二派の全員が一ヶ所に集合し布薩という儀式を行い、その比丘は過を懺悔したので、その罪は許されました。

（了）

現代に生きる阿弥陀さま

去る四月九日、神奈川県立音楽堂で開催された、浄土開宗八百年記念慶讃仏教文化講座に檀信徒の一人として参加して、誠に深い感動を覚え、一筆述べたく「浄土」に投稿させていただきます。

まず私は音楽堂に着き、同じ信仰をもった人々が次ぎ次ぎに自家用車で、あるいはバスで集まるのを見ておおいに力づけられました。法要は厳肅な中になされました。まず幼稚園児による献花の光景が舞台の上でおどおどしながらも、けなげに行なわれた様子が今でも目に浮びます。そして御法主もお坊さんも私たち檀信徒一同をふくめて、全員で合唱した宗歌や「一枚起請文」の力強い響きは、自然と口に阿弥陀仏を称えずにはいられないような響きがあり、念仏のある生活でなければ

ならないという確信が深まりました。

法要の後の大正大学の石上善応先生や講談の宝井馬琴師匠の講演、いやそればかりでなく関係者のあいさつや祝辞の中にも、一貫した共通の考えがあり、私が常日頃考えていることと全く同じような思いがして、より深い感動を覚えたのであります。

と申しますのは、現在は法然上人さまが当時の僧侶から見離なされた乱世の時代に生き多くのの人々に、阿弥陀仏信仰を説かれ、救いの手をさしのべられた時代によく似ているような気がいたします。いやむしろ今日程、物質的には恵まれてはいるが精神的に貧しい生活をしていた時代があったであろうかと考えます。

まさに現在の日本は3Cの時代などといわ

れ、クーラー・自動車・カラーテレビなどは必需品として扱われ、現代人は旅行やゴルフ、スキーなどと娯楽に異常なほど関心をもっているように思えるのであります。

ある本で読んだのですが、娯楽や遊びの反対語は労働であるのが普通ですが、現代人にとって娯楽や遊びは非現実的なものであり、反対語は現実であるというのであります。また最近の流行語に人間蒸発というのがありますが、人間が蒸発するとは一体どれほど恐ろしいことばかしれません。人間を水かなにかと間違えているのではないのでしょうか。

まさに現代は人間不在・精神的貧困の時代であると思います。

こういう時代にあって、今回石上・宝井両先生や関係各位によって、力強く法然上人さ



まの御教えを、南無阿弥陀仏を称えることの
必要性を話されたことは、私自身にとりまし
てもおおいに自信を与えられたといっても過
言ではありません。



よろこべる、よろこべない、ということ
は、宗教生活を志すもののつねに、こころ
を労することである。そして、それは、ま
ことに床しい悩みであるとも考えさせられ
る。

しみじみとよろこんで暮したい、という
ことは、すべての人のねがいであろう。

「法喜を妻とする」といわれた聖者のここ
ろもちを慕うことは、おめぐみを蒙って生
かされ、み光によって養われるものにとっ
て、極めて自然なことであろう。

よろこべる、よろこべない、ということ

そして浄土開宗八百年を迎えるにあたって
法然上人さまの御教えがより広く流布し、人
々の心にうるおいと力強さを与えるように祈
るのであります。

話　し　の　く　ず　籠

を問題にするころもち、むしろ美しいも
のであろう。さりながら、私たちは、こうし
た問題に悩むことによって、わが手のうちに
めぐまれているものに気づかないで、他人の
すぐれた法悦をうらやんで、それを真似しよ
うとしたり、いたずらに刺戟をもとめたりす
ることは、充分慎しまなくてはならない。

無理して、よろこぶことは危いことのおう
におもわれる。

よろこびは自然であり、無理のかからない
のがよい。しかし、それは、なげやりにして
おく、ということではない。粘り気をつけ

そうあってこそ、浄土開宗八百年の意義が
あると思います。

(神奈川県小田原市HK生)

て、よろこべるように生活を育ててゆかな
くてはならない。

私たちの生活は、うちすてておいてもよ
ろこべるようにはできていないから、よろ
こべるように、たしなむことが大切であ
る。

ただ、そのたしなみは、自然なものであ
りたいとおもう。

平凡な生活のうちに、ありのままに法味
を愛樂してゆきたいとおもう。平常心これ
道である、ということも味わうべきであ
り、法然上人が、「凡夫の生まれつきのま
までよろこべ」と申されたおさとしは、ま
ことに適切であるとおもう。

平凡な法喜こそ、凡人である私たちにと
っては、かえって、しみじみと身につくよ
うにおもわれるのである。



ひとくち伝記（五）

手術台の十念

高橋良和

大阪の名刹一心寺はその昔、法然上人の開創による寺である。

それというのも法然上人が四天王寺に参詣の折にこの一心寺の地において、大阪湾に入る夕陽をみて極楽を思い、日想観という行法を修せられたゆかりの地である。

この寺の住職に加藤真瑞さんが晋山したのは凡そ今から十年前のことであった。加藤真瑞さんは本宗の碩学であって、当時仏教専門学校や、高野山大学などに宗教学を講じた前田聴瑞先生の弟子であり大阪府下枚方の台鏡寺から師匠が一心寺に晋山したときにともに同寺に入ってずーと執事長をとめ、そのあと、竹田聴州さんが一時入山したが都合で退任したのでこの加藤真瑞さんがつづいて一心寺に晋山したのである。

加藤さんは晋山するとすぐこんな約束をしたのである。まあみててください。私は戦災で焼けた一心寺の本堂の再建

がありますのでそれに全力をつくさねばなりません。その代り本堂を建てあげたら、まあ十年先になりますが、そうしたら布教に本格的な活動をして大阪教区の寺院に協力申しあげたい。

と口ぐせのように言っていた。

ところがこの一心寺の本堂の再建である。加藤さんはまるで金のわらじを履いて材木さがしに出かけなければならなかったのである。

というのも、この一心寺は大阪市天王寺の天王寺公園につづく茶臼山の一角である。

であるからこの辺一帯は公園地区であるので鉄筋の本堂はまかりならぬというのである。

いつでも撤去出来るように、木造の本堂を建てなければ大阪市が許可しないのであるからまことに時代逆行というより仕方がない。最近の都市の本堂建築には、全く珍らしいケ-

スであるといえる。

加藤さんもこれには困ったので晋山以来、本堂の材木さがしということになったのはそれがためであった。

さて本堂は総工費一億円まず寺院の本堂として木造では戦後最大のものであるが、三年はかかったであろうと思う、十三間四面の見事なものが、完成したのであるが、その本堂の落慶前から加藤さんが不快を訴えだしたのであった。

どうも腹に食物を入れるとしくしくと痛む。

このようなことを言いだしてから半年もすぎたときであった。

やっぱり一度入院して精密検査をしてもらうかと。

というもので人のすすめで大阪市天王寺区の警察病院に入院したのであるが、どうしたことか手術をする必要に迫られたのである。

別に悪質の病気でもないし、下腹が痛む程度で手術せないといかんといわれるのだ。

まるで人に断りでも言うように、加藤さんはいよいよ手術することになったのである。

都心にある警察病院は静かなところではなかった。加藤さんはその四階の病室に入院してひたすら手術のときを待ったのである。

それは昼さがりの頃であった。

加藤さん、御用意が出来ました。

白い衣をつけた看護婦が呼びにきたのである。

加藤さんは静かに運搬車の上に横たわったが、あとは医師まかせ仏まかせというより外はない。

静かに扉があげられた手術室の空気はまことに重ぐるしい。ぶーんと鼻に入ってくる消毒液やどぎついアルコールのにおい、すべてが落ちつきを失うようないらだたしい香りであるし、その上、手術台の感じがとても心を憂うつにするのには想像にあまりある。

病名はとも角としても腹を切開するのであるから、病気にきまっている。腹をきるのであるから、まかりまちがえば生命にも関係すると思われる。

とりまく家族の心配顔をよそに御本人の加藤さんの顔は赤らんで、口もとに笑さえたたえているようである。

方丈さま、どうか御無事で手術がすみますように。

出入りの人々が、運搬車をのぞき込むように祈ったのであるが、御本人は、

まあ、そんなに心配せんかて仏さままかせやから。

といいながら、身体は手術台の上に移されたのである。

では皆さん、只今から手術にかかりますから、しばらく控

室でおまちください。

残酷に思えるような医師のことばである。

では先生、おねがい申します。どうか方丈さまの病気がなおりますように。

いや心配はいらないと思いますか、然し手術してみないと。

はい――

そう言うより仕方がなかった。

そのときである。

ほんとうに流れる血のつながりを断ちきるようにこの手術室の扉は、看護婦によって、じりじりと閉められようとしているのである。

では皆さん、あちらへ。

そういうと家族が二三歩さがったとたん、ピシヤリと戸は閉められたのである。

これから手術にかかりますが、麻酔の注射をいたします。それまではなにか言うことがあったらどうぞ。

医師は加藤さんの眼を魅入るようにこういったのである。それでは最後に念仏をとなえさせていたきたい。ごらんのようにわたしは僧侶でございますので、いつ仏のお迎えがありましても後悔がないように御十念をとなえさせてい

たきます。

注射器をもった医師とその看護婦が見守るなかに、加藤さんは左手にもった念珠の手を合わせたかと思うと静かに「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」とお十念を声高らかにとなえたのであった。

横にいる医師もおどろいたし、看護婦もびっくりしたのである。十念をとなえ終ると加藤さんは、

さあ、どうぞよろしくおねがいます。

まるで他人ごとのように腹をなでてみせたのであった。

そしてメスが腹部を切り開いたのはそれから一分もたたないうちであった。そして一時間、二時間、やがて手術は無事すんで麻酔のままの加藤さんが再び運搬車に乗せられて病室にかえってきたとき、医師は感心したように言ったのである。

いやーさすがにお坊さんでした。何百人と手術しましたがあの直前の声高らかな念仏にはわたしも教えられました。

なんでもないことであるが加藤さんのお十念には人を感化さす熱血が流れていたのである。

これが法然上人の念死念仏というのかもしれない。その加藤さんもそれから三年すぎた昨年十月遂に他の病気で亡くなってしまった。

けれど手術台のお十念は今も警察病院の思い出である。

◇ 浄土トラクト ◇

四季の寺まいり (再版) 安居香山著 価30・〒15

浄土宗のおしえ (五版) 宮林昭彦著 価30・〒15

一枚起請文をめぐって 村瀬秀雄著 価120・〒35

選択集私解 竹中信常著 価120・〒35

ものいう石 竹中信常著 価150・〒45

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
振替 東京 82187

村瀬秀雄訳

新刊

和文浄土三部経

新書版
204頁

附・法然上人撰「三部経釈」抄述

念仏信仰の聖典三部経の全訳

定価200円 送料55円

発行所 法然上人鑽仰会

TEL (262) 5944
振替 東京 82187

「浄土」購読規定

一部定価 金六十円

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 五月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十四年四月二十五日 印刷

昭和四十四年五月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和四十四年四月二十五日印刷 昭和四十四年五月一日発行

浄土

第三十五卷

第五号

定価金六拾円 (送料六円)